

特集 教育・協同を考える／風の学園

市民の手による自由な学校づくり

今一つの学校、今一つの生きかたの実現を目指す風の学園の運動

柳下 実（神奈川県／風の学園設立発起人会・事務局長）

〔経過〕

神奈川県鎌倉市に民間の教育機関である「鎌倉地域教育センター（代表・柳下換）」がある。このセンターは子どもたち中心の補習塾を開いたり、不登校児や障害児にも学びの場を提供したり、映画、コンサート、一人芝居などを通じて、地域での文化活動もすすめていた。

センターの開催者たちは、これらの活動を通じて、教育のことをいろいろと学び、語りあっていた。そんな時、楽しい勉学と教師と子、子ども同志の交流によって、みんなが豊かに育っていくはずの学校が、その反対に、子どもたちの管理と競争の場になっていること、そのような事情を背景に子どもたちの不登校やイジメが起きていることなどに理解が深まっていった。

「学ぶということは？学校とは？」という問いと語りの中から「小さくてもいいから自分たちの求める学校を手づくりでできないものだろうか。」「考えているだけでは仕方がない、一つ挑戦してみよう。」ということで、10人余りのセンター関係者や教師、塾生の親、教育運動をすすめている市民などが集って、一見無謀にも市民の手による自由な学校づくりを始めた。かくて、1988年11月に設立発起人会が発足した。そして目指す学校名も「風の学園」と決められた。風をとったのは、風の自由なイメージを自分たちの学校の自由さの表現に当てたのである。

しかし、素人のお父さん、お母さんのこと故、専門的な知識もなく、ただ情熱から事を始めた行

動の前には、幾重もの困難が待ち構えていた。学校の設立には何が必要か。とにかく、県庁に足繁く通った。最初は半信半疑の県の担当者ではあったが、その珍しい教育論（本当はまっとうな教育論のつもりであったが）と市民の情熱に心を動かされたのか、最低必要な基礎知識を教えてくれ、具体的に必要な校地面積や校舎面積を示してくれるようになった。

この条件さえ満たせばいいんだ。土地だ、資金だ、ということで人々はあちこちと情報を探して歩き廻った。また、教育の目標や内容の議論もすすみ始め、生徒の望む学校のイメージも少しずつ固まり始めた。

話が旨くすすむ時は何んでもトントン拍子にいくもので、発起人の知人の紹介で、地元の土地所有者が協力を約束してくれ、土地の仮契約も結ばれた。目の廻るような部厚い資料と設立申請書の作成も県の職員の指導もあって、やっと完成し、発起人会設立の3年後の1991年には設立準備申請書が神奈川県に提出されたが、この申請は私学審議会の審理を経て、その年の8月正式に県知事によって承認された。

この頃になると発起人も40数人となり、新聞、テレビなどのマスコミも「生徒本位の学校づくり」「管理教育からの脱皮を目指す」「教育体制への挑戦」「個性尊重、偏差値に決別」「手作り高校開校控え反響」などの見出しで報道するようになった。また、この運動を支援する輪もひろがり、後援会長には俳優の牟田悌三さんが就任したり、永六輔さん、井上ひさしさんなど著名人もチャリテ

ィの講演を引受けたり、賛同する音楽家のコンサートも開かれ、運動は大いに盛上った。

ところが不幸にも、この運動を理解し、協力してくれていた校舎予定地の所有者が若くして急に亡くなったその結果として用地を失うことになった。運動は大きなデッドロックに乗上げてしまった。付近住民の反対運動も解決の方向にすすみ、市への開発申請も承認間近であったこの事業も基本要件を欠くに至っては收拾せざるを得ず、発起人会は断腸の思いで、県、市への認可申請をすべて取下げた。学校づくり計画の発起人をはじめ、関係者は奈落の底に落とされたように茫然自失した。そして、発起人の中にはこれを機に運動から離れる人も出るようになった。発起人会は議論の結果運動の継続を決め、従来の発起人会を引継ぎながら、新たにより強力な発起人会を構成する努力が続けられ、運動は頓挫することなく、ねばり強く続した。

内外の逆風にもかかわらず、運動の中心になっていた人々のねばり強い行動力は、自由な学校づくりを支援する全国の父母、子どもたち、教育運動をすすめる人たちの援助と期待の中で、風の学園運動を不死鳥のように生き返らせた。折しも、イジメによる中学生の自殺や不登校の子どもたちの増加など、わが国の教育はますます深刻さを増していた。管理と競争を排した自由で個性的な教育を求める声も次第に増大し、「風の学園」のような学校の開校がますます必要な状況の中で「今の社会、今の私たちの力の中で、何が可能なのか？」学校関係者の模索が続けられた。

その時に浮上してきたのが、パソコンによる通信教育であった。パソコンという現代的通信手段が、在宅を基本にしながら、自由で自主的な勉強を可能にする。全国何処にいても、何時でも、誰でも学ぶことを可能にするこの事業を学園の発起人会は「これが、現状の条件下で実現可能な教育実践だと」確認した。

かくて、約2年風のフォーラムという形で、パソコン通信による教育の試行がなされ、その経験をへてパソコン通信教育の実行が決断された。「風

の学園通信教育部高校課程（三年制）」の開校が今年の4月に向けて準備され、新しい自由な教育の胎動が始まろうとしている。

地位も家も名もない市民手づくりの学校づくり運動は、様々な困難に突き当たりながら山や谷を超えて前進し、ささやかながらここまで到達した。今後とも困難は続くと思われるが、それを超えろ力を信じて私たちは進んでいる。子どもたちのために。「君の行く道は果てしなく遠い。だのに何故歯をくいしばり君は行くのか、そんなにしてまで……」私の唇からこんな歌が洩れる今日この頃である。

戦後50年間私たちは懸命に働き続けた。経済の高度成長こそが社会発展の基礎だと多くの日本人が信じてきた。人々はたくさんの物をつくり、たくさん売り、たくさん儲け、競争に打ち勝つことが真理だと教え込まれ、実行してきた。そしてその事が自分や家族の幸せにもつながるのだと多くの人たちは信じてきた。しかし経済の成長がとまり、バブルもはじけて不況がすすむ中で、人々はふと立止まり周囲を見まわす機会に出会った。

その目には破壊された国土、腐敗した政治、切り離された家族の絆、競争に負けた高齢者や子どもたちの姿が映った。

教育も投資の対象となり、よい学校に入りよい大学を出て、大きな企業に就職することが学びの目的になり、親たちの学歴や学校に対する信仰に追いつめられている子どもの姿も痛々しかった。

こんなことでいいのだろうか！私たちの今迄の生きかたは何んだったのだろうか。今一つの生き方があってもいいではないか。価値のないとされたものが価値を持つ、そんな哲学だってある筈だ。人々の考えが着実に変わり始めた。そんな目で教育を見る時に、もう一つの教育、もう一つの学校のイメージが浮上る。

子どもたちが生きるために学び、学びながら生きる、そんな教育こそが教育の原点ではなかったか。自由な教育の場でこそ、友をそして人間の可能性を信じ、人のいのちの尊さを知ることができ

る。学ぶ喜び、生きる力をすべての子どもたちに保障する。そんな教育や学校があったっていいではないか、今不登校の子どもたちが大人たちに訴えているのは大人たちの価値観の転換なのではないのだろうか。

「風の学園」での教育実践はそのことへの挑戦の小さな、しかし、踏みごたえのある協同の第一歩なのである。

〔組織、経営形態〕

学校法人に準ずる。発起人会（96年4月以降理事會）、後援会、講師會議（予定）

〔教育内容〕

教育の目標

人間として広い視野に立った統一的な展望を創り上げることのできる自己形成力を養う。

教育の基本

1. 学びたいという要求は、人間が生きるために本来持っている基本的要求であることを認める。
2. 生徒が学び喜び、生きる力を身につけ、個性と創造性を伸ばし、人間らしく自己実現をはたす。
3. 生徒と先生、生徒同志が向かい合って互いに学び、学ぶ意欲をひきだす。
4. 生徒一人ひとりの自由、平等、学ぶ権利を保障することをめざす。
5. 地域に開かれ、地域の人たちと交流しながら、地域文化創造に貢献する。

教科の特徴

フィールドワーク「平和」を基本に学ぶ。

風の学園では自学・自習が基本だが、同時に体験や実践を学びの出発点として考え、フィールドワークを重視する。

また、「平和」を総合学習として学び合う。「平和」を学ぶことを通じ、人権や環境の問題も学ぶ。

学習のしくみ

3年制の単位制高校の形をとる。パソコン、電子メールによる各教科毎のレポート、日別学習記録表の提出、月1回のゼミナールと語学講座、夏期集中スクーリングが開講される。シーズンプログラムとしては、地引き網、農業実習、演劇実習、コンサート、球技大会、スキー教室などがある。

連絡先：鎌倉市長谷2-11-21

TEL：0467-24-9425

FAX：0467-22-5477

もうひとつの
学校を選んで
みませんか

3年制パソコン通信教育
アメリカ私立高校卒業資格取得可能

フリースクール

風の学園
通信教育部高校課程

〒248 神奈川県鎌倉市長谷2-11-21
TEL 0467-24-9425・0467-22-5477
FAX 0467-22-5477